

「自分は大丈夫」「今まで大丈夫」「まさか……」  
救助された人々は口々にそうつぶやいた。  
200名を超える死者を出した、西日本の  
7月豪雨では、避難指示発令後も自宅待機  
を続けてしまい、屋根の上から手を振って  
救助を求める光景が多く見られた。

日本人は、いつの頃からか「きつと大丈夫！」という願望に依存し、「かくすれば、かくなる」現実の客観的検証による選択と決断を遠ざけてきた。

これは決して防災に限ったことではなく、防衛、防犯、防疫はもとより、資源供給という安全保障全体に及ぶ国家・国民の脅威の原点である。

敗戦、降伏後に、国外に居留する国民の避難が遅れ、多くの犠牲を出したことも、迫る現実より願望に依拠してしまう国民性と、現実を効果的に伝達できない国家とのコミュニケーションギャップがもたらした悲劇だ。

戦後、このような国民の身に迫る危機、失敗の本質を検証せず、幾多の事件、事故の度に、誰かのせいになり、新しい「大丈夫神話」を流布してきた。

狭い国土の地震頻発国にかくも多くの原発が存在する現実も、史上類を見ない化学兵器テロを実行したカルト団体が今も活動を許されている現実も、この「大丈夫神話」が支えている。Jアラートや防災無線の曖昧さは、情報を受け取る国民の疑心暗鬼を生み、テレビの垂れ流す「感傷」は、無意味な想像や推測をドラマ仕立てにするだけで、現実の検証や改善にはほど遠い。

## 脱大丈夫! 脱まさか!

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

聞いた側の判断に委ねる情報提供の在り方が、「本当に危険なの? 本当は大丈夫なんでしょ」という、願望とカン違いを増長させている。

都心のスタジオから淡々と発する「直ちに命を守る行動を!」という言葉にも、心を動かすだけの説得力は伝わってこない。本当!に差し迫った脅威があるのなら、行政が徹底して罰則付き「避難命令」を強制すべきだ。

情報を受け取る側の良心に依存するような曖昧さは、むしろ残酷な結果を招くことになる。さらに言えば、想像や推測の域を出ない地震予知など、混乱とカン違いを招くだけであり、天災にあつては、強固な防災インフラの構築と、発生後の減災システムこそが肝心なのだ。過去の失敗の検証を怠れば、再び同じ失敗を繰り返す。あてにならない科学的予知より、古い石碑や文書、土地に伝わる言い伝えには、必ず、天災に関する人智が隠されている。

天災には決して抗えない。しかし、人智と経験で守れる命は多いはずだ。国家は、本気度を示す情報提供と、覚悟を促すインフラ構築に責任を持つ。国民は、学習の努力と防災インフラへの協力の義務を負う。

「国民の命を守る」安全保障は、不  
断の検証と改善の積み重ねである。  
大丈夫!を捨てることから「まさか」の備えが始まる。



### Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集  
『雲涯蒼天』  
定価700円  
Amazonにて販売中